

## 学位論文内容要旨

### 学校統合に伴うモンゴル民族教育の変容 —中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に—

賽漢花

本研究の目的は、中国内モンゴル自治区における学校統合に伴う民族教育の変容を明らかにし、その変化が民族教育に対していかなる影響をもたらしたかについて、現地調査に基づき考察することである。

本論文では、牧畜地域である赤峰市アルホルチン旗のバヤンウンドゥルソムの小・中民族学校を対象としている。言語教育だけでなく、「活動」「朗読」「歴史」などの授業を参与観察していることが本論文の特色である。さらに、牧畜地域、農耕地域、都市部という3つの地域が混在する赤峰市をフィールドとして、民族学校を比較し、学校統合に伴う影響を分析した。調査方法としては、聞き取り調査だけでなく、学校での授業や活動の参与観察も行っている。聞き取り調査についても、教育関係者、保護者、生徒への聞き取り調査を行い、言語生活と伝統文化体験など、民族生活の全体に迫っているところに意義がある。

牧畜地域、都市部、農耕地域の教育現場を比較した結果、民族教育の変化は以下の通りである。

(1) 牧畜地域の教育現場では、第一に、生徒たちが日常生活（衣、食、住、言語、生活習慣）において民族文化から離れ、農村や都市部の影響を受けたことが大きな変化である。学校統合前は、民族文化の重要な部分である牧畜生活の中で日常的にモンゴル語を話し、牧畜生活に密着したモンゴル語と文字、語彙が自然に身に付けられていた。しかし、学校統合後は、漢化が進んだチャブガの周辺で話される言語がほぼ漢語になっている。これがモンゴル語とモンゴル文字、語彙の喪失に繋がっていると言える。このため、生徒たちのモンゴル語の能力が低下した。第二に、学校が実家から遠く離れたことで、不登校の生徒の数が増えた上に家庭教育ができなくなった。統合前は、自宅から通う生徒たちを地域の人々が見守りながら社会的なしつけを行っていたが、閉鎖的な寄宿舎生活では社会への参加ができなくなっている。家族から離れ、家族から受ける家庭教育の機会を失うことで、学校での学習ができて、モンゴル人としての伝統的モラルや礼儀作法の認識が低下している。第三に、学校統合前は、ナーダムなどの民族文化体験が生徒たちの民族文化に対する関心を育み、民族意識を高めることに大きな影響を与えていたが、学校統合により、生徒たちが牧畜地域の実家から遠く離れ、寄宿舎生活をせざるを得なくなった。寄宿舎生活により、日常生活の中で触れていた牧畜文化に接する機会が失われ、民族生活や文化体験の機会も失われている。これにより生徒たちの民族意識が低下していると考えられる。第四に、学校統合により、教諭の過剰人員が生じた。民族の歴史や伝統文化を教える教諭よりも、「大学卒業」という学歴のみを重視した教員配置が進められ、モンゴル民族の歴史を教

える教諭が教壇から追われた。また、統合前には民族の歴史を教えていた「活動」の時間の内容が、野菜栽培やサッカーに変わり、民族の歴史を自習していた「朗読」の時間が、進学準備のための補習の時間になった。それにより、民族の歴史を学ぶ機会を失った。

(2) 都市部の教育現場では、第一に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちのモンゴル語の能力低下が大きな変化としてあげられる。生徒たちは都市化の影響を受け、日常的な生活の言語環境はほとんど漢語となり、日常的に触れ合うゲームなどでも漢語を使うようになった。モンゴル語能力が低下したことで、モンゴル語の語彙、文字の喪失に繋がった。第二に、日常生活におけるモンゴル文化やモンゴル語と触れ合う機会の喪失である。伝統的な民族文化と触れ合う日常生活から切り離されたことで、モンゴル語の授業を理解しにくくなり、特に、民族習慣、遊牧生活に関する文字、語彙を理解できなくなった。第三に、都市部のモンゴル民族学校の生徒たちはモンゴル民族の伝統行事への参加がほとんどできなくなった。ナーダムなどの民族文化体験が生徒たちの民族文化に対する好奇心を育み、民族意識を高めることに大きな影響を与えていた。民族生活や文化体験の機会が失われることにより、生徒たちの民族意識が低下した。

(3) 農耕地域の教育現場では、第一に、モンゴル民族の子供たちが自分の母語で勉強できなくなったことが、民族の言葉の喪失に繋がった。従って、本来の「それぞれの民族が自らの言語や文化を維持するために行う教育である」という民族教育の目的を果たすことができなくなっている。第二に、民族の言語だけではなく、モンゴル民族の伝統文化、生活習慣、伝統行事から切り離されることとなり、「民族的マイノリティーの権利保障の中で、民族語の使用や民族文化、歴史の継承を目指す民族教育は重要な要素である」という民族教育の役割を果たせなくなっている。第三に、モンゴル民族の言葉、モンゴル民族の伝統文化、生活習慣、伝統行事から切り離されることとなったことで、漢化が進んだ。漢化したことで、モンゴル民族という民族アイデンティティの喪失に繋がっている。民族教育にとって危機に陥り、モンゴル民族教育が中国語教育に融合されたことになる。

本研究は、このような国家政策の影響を強く受けて、実際に内モンゴル自治区赤峰市において進められたモンゴル民族学校の統合の実態と学校統合が民族教育に及ぼした影響の現実を分析したものである。歴史的な背景により赤峰市は、牧畜地域、農耕地域、都市部から構成されている。そこで、それぞれの地域でのその影響の現れ方の違いについても指摘した。その中でもとりわけ深刻な影響があったのは、牧畜地域のバヤンウンドゥルソムの中学校および民族教育であった。そこでは、民族文化や民族教育を振興するという国家政策の下で実施された学校統合が、その目的とは逆の効果をもたらしているという現実が明らかとなった。民族文化や民族教育を振興する教育政策は、牧畜地域、農耕地域、都市部など地域の多様性や歴史的背景を丁寧にふまえる必要があるということが、本研究が示唆するところである。そのためには、一律の政策展開ではなく、各地域の内発的な発展を促進するものでなければならない。とりわけモンゴル民族の伝統文化を生活の中で保持している牧畜地域に焦点を当てた政策展開が求められていると考えられる。